

# 多文化研と私の15年

藤巻 秀樹

(ジャーナリスト、元日本経済新聞編集委員)

2024.12.7

多文化研は35周年を迎えたが、私と多文化研の歴史はその半分にも満たない15年である。2009年春、私は日系ブラジル人が集住する愛知県豊田市の保見団地で1カ月間の住み込み取材をし、団地の人間模様を描く13回連載の新聞記事を書いた。当時、私は日本経済新聞の編集委員で、数人の記者とともに、ちょっと特殊な場所に住み込んで記事を書く企画を担当していた。保見団地の連載を終えてから、日本における外国人のことが気になり始めた。次に何を書こうかと思っていた時に知人から紹介されたのが川村千鶴子先生である。

2009年秋、JR新大久保駅に降り立った私は街の喧騒に圧倒された。聞きなれない異国の言葉、ハングル文字の看板、鼻を突くスパイスの香り、若い女性たちの群れ…。街を少し歩いた後、約束の場所である駅前ビルの4階に向かった。住み込み取材の第2弾として「新大久保」を候補の一つに考えていた私は、川村先生から様々な貴重な話を伺った。日本での生活に問題を抱えた外国人を支援するNPO、日本語が不自由でイジメにあっていた子供たちに学習指導をする女性たち、韓流ブームに乗り日の出の勢いの韓国人青年実業家、韓国人店主との関係に苦慮する商店街の日本人店主たち、戦前からこの街に住む在日韓国人の苦難の歴史など、この街が持つ変化のダイナミズムとともに、外国人受容と排除の奥深い物語に興味を惹かれた。この時から多文化研と私の15年が始まった。

「アジア人が集う街・東京『オオクボ』に住んでみる」は日経新聞夕刊「こころ面」で2010年4月から6月にかけて12回にわたり連載された。「コリアタウン」ではなく「アジア人の街」としたのは当時すでに韓国だけでなく、中国人、ネパール人、ベトナム人、中国朝鮮族など様々な民族が暮らし、ビジネスを営んでいたからである。新大久保駅の北側にはハラルフードの店が並ぶ一角がある。ここにはビルの中にモスクもあり、紙面で「イスラム横丁」と名付けた。その後、この名が定着し始めているのは、ちょっとした自慢だ。

連載企画が終わった後も、多文化研の研究会には時間が許す限り参加した。多文化研には様々な研究者や実践者が名前を連ねている。新大久保企画では川村先生のほか、稲葉佳子さん、小林普子さん、藤田ラウンド幸世さん、イ・スンミンさんなど多くの方々にお世話になった。新大久保の後に住み込み取材をした新潟県南魚沼市の外国人花嫁の連載は多文化研で武田里子さんと知り合わなければ、企画を思いつきもしなかっただろう。住み込み企画によって多文化共生・移民問題の分野に本格的に乗り出した私にとって、多文化研は取材のヒントを得たり、取材対象の人に出会えたりする貴重な場だったのである。

多文化研がユニークなのは、多種多様な人が集まっていることである。研究者がもちろん一番多いが、それに偏らずNPO、日本語教師などの実践者、法務省、文科省、外務省など関連省庁や自治体の職員、政治家、ジャーナリスト、弁護士など職業や国籍、思想信条も右から左まで様々な人が関わっている。自由でオープンな感じが学会などと比べ敷居が低く、気軽に参加できるのが利点だ。

私は2014年に日経新聞を退社し、縁あって北海道教育大学の教員になり、生活の拠点を東京から函館に移すことになった。この頃から次第に多文化研から足が遠のいたが、それでも時々上京し、欧州の移民・難民問題や新在留資格「特定技能」などのテーマについて発表させてい

ただいた。函館では学生たちと外国人技能実習生と市民の交流会を開いたり、外国人住民が小学校で自国の文化を語る異文化理解講座を企画したり、多文化共創に向けた取り組みもした。こうした実践活動も多文化研での経験があったからできたと思う。

この15年間で日本に住む外国人をめぐる状況は大きく変化した。在留外国人の数は2024年6月末時点で358万人と1.6倍もの伸びを示した。「特定技能」創設や技能実習制度に代わる育成就労制度の導入も決まるなど、外国人労働者の本格受け入れが始まっている。「移民国家」に向かう日本にとって多文化共創の精神が今ほど求められている時はない。多文化研の役割はますます大きくなったといえるだろう。

#### 著者プロフィール：

藤巻 秀樹

ジャーナリスト、北海道教育大学非常勤講師、日本国際学園大学非常勤講師。専門は移民政策・多文化共生論。1979年東京大学文学部仏文科卒業、同年日本経済新聞社入社。大阪経済部、同社会部、パリ支局長、国際部次長などを経て編集委員。愛知県豊田市保見団地、東京・新大久保などの外国人集住地域に住み込み取材をして長期連載企画を執筆した。

2014年～2020年、北海道教育大学国際地域学科教授。